
マジメかっ！ 笑道わらいのみち

桶乃弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジメかつ！ 笑道わらいのみち

【Nコード】

N2087W

【作者名】

桶乃弥

【あらすじ】

内気で真面目な少年が役者を目指してタレント養成所へ。しかし、何の因果かお笑いのクラスに配属されて……。恋とはちゃめちゃん仲間ともう一人の自分探し。『わらいのみち』を歩んだ彼が辿りついた答えとは？

この作品は携帯サイトで掲載したオリジナル作品を、加筆修正後アップしています。

僕の居場所（1）

中学二年の夏休み。また訪れる新学期を前にして、僕は自分の居場所を探していた。

別に今の生活に不満があるわけではない。衣、食、住すべてにおいて何不自由なく流れる時間。にもかかわらず僕はさまよっていた。

僕は一体何がしたいのだろう。何を求めているのだろう。僕の中で「結論」というプレッシャーが何度も何度も押し寄せていた。でも、それに気付きながら正面から受け止める事無く、今日もただ家の中でボーッと好きな音楽を聴いている。

「なるようになればいい」

そんな風に自分を抑え込んでいた。部活に励む事などなく、勉強なんてなおさらやる気も出ない。先生の話もろくに耳に入れず、教科書に無意味な絵を描いて貴重な時間をプチプチと潰していたくらいだ。成績の不安など少しも気にならなかった。友達と馬鹿な話で盛り上がって、この中学生生活をのんびり過ごせばそれでいいのではないのかとそう思っていた。

でも、やがては必ずやってくる高校受験、そして大学、就職。まだ先の話なのに、避けては通れない現実を、やり過ごす事が困難に思えてきた中学二年生の夏休み。

「何かが足りない」

はたから見れば普通の男子中学生。小学校の頃は我先にとばかり教室で大声張り上げていたはずだった僕は、いつの間にか大人しい

地味なタイプになっていた。ちょっとしたイジメを受けた事も一因かもしれない。そこから表向き目立つことに臆病になった。その積み重ねはやがて自分をさらけ出す術を失っていたのだ。自然と家の中でも家族との言葉数は気付かないうちに少なくなっていた。

「どこかで発散したい」

だからといって誰かを傷つけるのではなく、人と共存できる自分にしか生み出せない居場所が欲しかった。その居場所で二つ目の自分を大いにさらけ出す事さえできたなら。この胸のくすぶりも少しは癒えるのかもしれない。本当は人一倍目立ちたがりである自分の性格を誰よりも一番知っていたからこそ。

「とにかく、この世で自分の名前を残したい」

ぼやけた未来にまだ見えぬ目標が植えつけられた夏休みの終わりだった。

僕の居場所（2）

ある日の朝。テーブルに置かれた新聞を開く。新聞を読むといってもテレビ欄とスポーツ欄を目で流すくらいだ。結果面白そうな番組や記事が無い朝は少しガツカリする。その日もそんな朝だった。

ふとテレビ欄の横の広告に目が留まった。そこには「新人オーディション願書募集」という文字が大きく躍っていた。そしてこの夏の昼ドラで見覚えある新人の女優や子役の写真が数名並んでいる。どうやら芸能プロダクションのタレント養成スクールらしい。

「養成所かあ……」

その時、僕の中で大きな衝動が駆け巡ったのだった。そして気がつくとその広告に僕の目は釘付けになっていた。見ると所定の書類を提出し、二度の書類選考の末、合格者にはプロダクション主催の無料オーディションへの参加資格が与えられるという。

「お金かからないなら送ってみようかな」

自分でも驚く行動力だった。僕は履歴書を買ってくると必要な事を書き込んでいく。するとほとんど白紙に近い履歴書が出来上がった。それもそうだ。学歴など小学校卒業と中学校入学くらいしか書くことがない。かといって幼稚園卒園など流石に気が引けて書く気にならない。おまけにそろばんなど習い事もやってこなかっただけに、世間的に認めてもらえそうな資格や特技なんて一つも持っていない。

「あ、そうか」

何の取り柄もない奴でも、この世界は手を広げている。そう考えることで気が楽になった。僕は意気込みを示そうと志望動機の欄いっぱいに関心を書き込んだ。そこしかアピールできる場所が無く、でも、そこが何も無い自分を示すことのできる場所だったから。

履歴書を書き終え、アルバムから適当な写真を選び終えるとそれを白い封筒に入れた。あとは切手を貼って投函するだけだ。

「母さんくらいにはこの事を言っておこうかな……」

一瞬そう思ったが、もし書類選考で落ちてしまったら顔から火が出るほど恥ずかしい話だ。僕は親には何も告げない事にして家を出るとその封筒を近くのポストに放り込んだ。ポストの蓋がパタンと閉じた時、どこからか変な達成感が僕の胸に湧いてきたのだった。

書類審査（1）

新学期が始まった。相変わらず淡々と流れる生活を送っていたが、実は授業中も審査の事で頭がいつぱいだった。あれからというものが、学校から帰宅すると真っ先に郵便受けを開く作業を楽しみにしていたが、なかなか審査結果の通知は来なかった。

一ヶ月ほど経ち、願書を出したことも少し忘れかけてしまった頃、家に帰ると郵便受けの中から白い封筒らしき物がはみ出していた。特に気に留めることなく蓋を開けて取り出し、その大きな封筒の表紙に目をやると、差出人である社名が印字されていた。

「あ、きた！」

それは紛れも無く僕が願書を出した芸能プロダクション『フェイス・アクト』からの封筒だった。僕は慌てて封筒を真上にかざし、光にすかして中を確認した。間違いない。中に何かは入っている。……いや、もちろん空の封書など届く訳も無いわけで。ただ、そんな変な事が気になるほど僕はその時舞い上がってしまった。

僕は手紙の角度を変えて中に書かれているであろう文字を探ろうとするが、さすがに合否の結果までは分かるはずも無く……。僕は家の中に入ると靴も脱がず玄関先でその封筒を開け始めた。そして慎重に手を差し込み、中に入っている紙を取り出したのだ。

「おや？」

てっきり便箋か何かで届くと思っていたが、驚いた事に金縁の入った一見表彰状のような紙が入っていた。そしてそこには僕の名前

である「奥村光弘殿」と書かれており、その横に「第一次書類審査に合格しました」という文が書かれていた。

「……う、受かった」

まだ一次の書類選考、それもオーディションを受けるための段階のもの。それでもその時の僕にとっては、どんな形であれ自分の存在を認められたという事が、嬉しくて仕方が無かったのだ。

その日の夜、僕は何度も何度もその文を読み返したのだった。

書類審査(2)

僕は一次審査の合格を母さんに伝えた。「母さんはどういう顔をするだろう? どんな反応をするだろう?」。そう考えると少し緊張したが、何よりも「合格」という響きを早く伝えたいその一心で打ち明けたのだった。

「これ、いつの間に送ったの?」

母さんは驚いた様子でまずそれを聞いてきた。応募を内緒にしていた事に対して怒られるのかと思ったが、「夏休み中にちょっと新聞で読んで……」と僕が素直に打ち明けると、母さんは嬉しそうに言ってくれた。

「へえー、良かったね」

反対されるわけも無く、深く追求されることも無く、母さんはただそう言っただけでも感心した様子で「アンタがねえ……」としきりに口にしたのだった。

それはその日のうちに父さんにも伝わったようだ。でも、取り立てて父さんからは何も言われなかった。

それから二週間が過ぎ、「最終書類選考合格」の通知が届いた。そしてそこにはオーディションの日時、時間などが書かれたプリントも同封されていたのだった。

「最終も合格したよ。今度はオーディションだって」

母さんにそれを話すとまた素直に喜んでくれた。そして今度は父

さんや妹の雪菜も「おめでとう」と声をかけてくれた。さすがに家族みんなに言われると照れくさくて「まだ早いよ」と僕は謙遜したがどこかで少しばかり鼻が高くなっていた。

こんなに温かい家族が居ることで、僕はきつと甘えん坊に育ってしまったのだろう。そして幸せを幸せと感じ取れないからこそ、僕は僕なりに茨の道を探しているのかもしれない。茨の道を笑って過ごせる自分の居場所。自分だけしか認められない居場所を。

そう言えばその日の夕飯は、いつもよりちよつとご馳走だった気がする。それに気づいたのはもう何年も経ってからだった。

オーディション(1)

オーディションの日がやってきた。だけど朝からどんよりと曇り空。にわかには緊張している僕の心を、空が代弁しているようだ。

オーディションの内容なんて分からない。一体、何を求められるのだろうか。やはり演技力を確認するのか。まさか水着審査なんて無いだろうな。そんなつまらない空想を描くうちに、電車は目的の駅に着いた。

会場へ向かう道中、僕と同じくらいの年齢らしき多数の女の子がゾロゾロと同じ方向に歩いていく。

「もしかあの子達もオーディションを受けるのだろうか？」

もちろん、それは勝手な決め付けで、会場であるビルに着く頃には駅で見かけたライバルになるはずの面々は殆ど残らなかった。

僕は内心、競争率が低くなったという妙な安堵感も芽生えた。だが、立て看板に書かれた『フェイス・アクト オーディション会場』の文字を見た瞬間、再び緊張が体を駆け抜けるのだった。

気持ちを落ち着かせるため、しばらくビルの前で参加者の様子を伺ってみる。その殆どが中高生くらいの女の子だ。友達同士で訪れたり、僕と同じように一人で乗り込んできたりする者も居た。しかし中には親子連れの姿もチラホラ。なるほど、例えこのオーディションが学歴や経歴にプラスになるようなものでは無いとしても、試験を受けるという事に変わり無く、親が心配してついて来るのもおかしい話では無い。

ただ、僕にとってそんな選択肢はあり得なかった。仮に親が「付いて行く」と言い出していたら、速攻で「来ないでくれ」と言っただろう。それは此処から先は自分で切り拓きたいという僕なりのケジメだった。願書を出した時からそう決めていたのだ。

会場の横に設けられた待合室は、多くの参加者で溢れかえっていた。小学生らしき姿もあれば、中年の男性や女性、お年寄りの姿もある。他人から見れば一体何の集いだろうかと思う異様な光景だ。僕はそんなライバル達の中、今一度気を引き締め直すと、整然と並べられたパイプ椅子に腰を下ろした。

しばらくすると係員らしき女性が声をかけてきた。年齢を伝えると番号札と一枚の紙を差し出される。

「呼ばれたら隣の部屋に来て下さいね」

係員はそう言うのと立ち去った。僕は軽く頭を下げて見送った後、その紙に目を通す。そこには台詞や表現力のテーマなどが書かれていた。どうやらこのオーディションで使用する課題のようだ。僕は時間を惜しみ一心不乱に課題であるその台詞などを覚えようと集中する。だが、迫り来る緊張がそれを覆いつくし、なかなか頭に入らない。結局、自分の番号を呼ばれるまでに覚えきることが出来なかったのだった。

「これは……ヤバイ」

わずか五行ほどの台詞を覚えきれない自分を恥じた。これもきつと審査の対象になる。

曇り空は晴れる気配も無いまま、僕は審査会場のドアノブに手を

かけた。

オーディション(2)

オーディション会場の部屋に入るとそれまで混みあっていた待合室とは違い、意外に広い部屋だったので少し驚いた。

部屋には手前から奥に向かって机が一行に並べられ、審査員の先生方が等間隔で着席している。ざっと見渡しても十人以上居るようだ。この先生方全てに審査してもらおうという事なのだろう。

机の前には先生の名前と審査担当の書かれた紙が張り出されており、演技指導や発声といった科目ごとに分けられていた。オーディションは特に審査する科目の順番が決まっているわけでは無いらしく、ランダムに空いた先生から順に審査を受けるようだ。

基本的に先生と一対一で審査を受ける形。てっきりグループごとにまとめて審査されると思っていた僕は、思い描いていた物と違ったそのシステムに、緊張からますます混乱してしまった。気付けば先ほどまでかろうじて三行程度は覚えていたあの台詞も、今ではすっかりどこかへ飛んでいってしまった。

「次は……二百三十五番、奥村さん」

係員から呼ばれ返事をする、『審査表』と書かれた紙を手渡された。どうやらこの紙に先生方が採点をつけるようだ。

「それでは、君は始めに歌唱指導の津村先生の審査を受けてください」

「あ、ハイ」

係員は僕の前を歩き、先生が座っている机の前へと案内してくれた。

実はその間、僕は係員が言った『歌唱指導』の言葉が引っかかっていた。それはこのオーディションが役者としての演技中心の審査だと思い込んでいたからだ。

「歌唱っていう事は、やっぱり何かを歌わせるといふ事だろうか？」

だが、先ほど手渡された課題には歌唱審査らしき科目は書かれていない。「せめて心の準備のために課題曲くらい載せておいて欲しいな……」と、僕は少々悶々とした気持ちのまま津村先生の前に立った。

恐らく五十代前後と思われる男性の津村先生。先生は穏やかな笑みを浮かべながら僕に話しかけた。

「君は……今日これが初めての審査ですね」

「ハ、ハイ！ お願いします！」

そんな僕のハキハキとした返事が気に入ってくれたのか、津村先生はさらに機嫌良さそうに笑顔を見せて僕にそれを言い放った。

「それでは、君の好きな歌をいま歌って下さい」

「……はい？」

いきなりの難題に僕は愕然とした。

・7・ オーディション(3)

津村先生は戸惑う僕に気を使ったのか、続けてフォローしてくれた。

「何でもいいよ。歌詞を覚えている曲なら。例えば童謡でもいいからね」

その先生の言葉でますます僕は混乱した。確かに童謡なら歌詞も覚えているし、メロディーも単調で歌いやすい。採点付きカラオケの高ポイントをヒットするには最適だとも言われている。

しかし、ここにはカラオケのような伴奏はない。何より小学生ならまだしも、オーディションという大舞台で、「チューリップ」や、「いとまきのうた」や、「かもめの水兵さん」といった歌を、中学生にもなつて臆面も無く歌える訳がない。あまつさえ学校の朝礼では後ろに並ぶくらい背も高く、どちらかと言えば老け顔と思うこの僕が。

周りを見渡せばライバルが多数「合格」目指し審査を受けているこの状況。ここで僕が大声を張り上げ童謡など歌い出せば、きっと彼らは心の底で「勝てる、コイツには絶対勝てる」と、含み笑いをこらえるのに必死になるのは目に見えている。

チラリと津村先生を見る。どうやら僕のように、いきなり出された課題で戸惑う参加者には慣れているようだ。選曲に時間のかかる僕に対し、特に苛立つ事も無く笑顔で答えを待っていてくれる。

「どうすればいいんだ……」

すると僕の体全身が突然猛烈な寒気に襲われ、目の前が青白い光に包まれたのだった。「ええい、ままよ！」。僕は心で叫んでついにある一曲のタイトルを口走った。

「石原裕次郎さんの『ブランデーグラス』を……」

すんなりと言い切った。この曲はたまたま昨日テレビで見た、「ナツメロものまね大全集」で流れた一曲だ。

別に取り立てて好きなわけではない。親が幼少の頃よく聴いていて、自然と歌詞も記憶に残っていた。ただそれだけの事だ。

津村先生はそのタイトルに少し驚いたような顔をしたが、すぐさま「はい、じゃあお願いします」と丁寧に答えてくれた。僕は少々震える声で『ブランデーグラス』を歌い始めた。

「じ……、こおくれえ〜でえ〜およしよお〜……」

歌っている最中、ブランデーがこれほど苦いものとは思わなかった。もちろん飲んだ事は一度も無いが。

僕が石原裕次郎さんの名曲『ブランデーグラス』の一番を歌い上げると、審査員の津村先生は「難しい歌なのによく歌えたね」と、笑顔を交え褒めてくれたのだった。これは良い印象を与えられたようだ。

津村先生は採点表に記号のような物と、評価らしきメッセージを書き込むと僕の前に差し出して言った。

「じゃあ、今度は演技の坂野先生ね」

僕は大きく頭を下げて「ありがとうございました」と礼を言うと、坂野先生の居るテーブルを探した。その足取りは会場に訪れたときよりも遥かに軽い。難問をクリアし、手応えを感じたのだ。

「あ、あの先生だな……」

自信満々で坂野先生の前に立つ。坂野先生は先ほどの柔らかな感じを受けた津村先生とは違い、少々厳つい顔をした初老の男性だ。僕は浮き足立つ気持ちを抑えて先生の言葉を待った。

「はい、では演技を見せてもらいます。君は今、空を飛んでいます。その体で思いっきり表現してください」

やられた。またしてもカリキュラムには載っていない課題をぶつけられてしまった。どうやらこの場で体を使って一人で黙々と表現しろというらしい。しかも直訳すれば『鳥になれ』と言わんばかりの強引な設定。周りには大勢の人が居るというのに、これではしら

け鳥の刑だ。

しかし、この時僕は自分に問いかけた。

「何を恥じる必要があるのだ？　ここはタレントを目指す為の第一歩の場所なのだ。ひとたびタレントになれば、人々の白い目に晒されながら、語り、踊り、時には歌わなければならないのだ。恥ずかしさも何もあつたものではないではないか」

その時、再び全身に寒気が走ると青白い光が目前に広がった。僕は無意識のうちに両手を真横に広げその言葉を発した。

「僕は風の子！」

そしてテーブルの前を「ブンブン」言いながら八の字を描き走り回った。とにかく走り回った。

「僕は風の子！　ブンブンブン！　僕は風の子！　ブンブンブン！」

これはどうしたと言つことか？　自分で今、何をやっているか分からないほど、僕は『風の子』になっているではないか！　その心地よさからついつい調子に乗り、坂野先生の存在も忘れ、無我夢中でその場を走り回るのだった。

僕は今、空を飛んでいるイメージを浮かべ、まさしく『風の子』になった。両手を広げ縦横無尽にその場を疾風のごとく旋回していた。誰の声も、誰の目も気にせず、僕はそれを思いっきり表現し続けたのだった。

しかし、あまりに調子に乗りすぎてしまい、わずか三メートルほど横で、別の参加者が審査を受けている事など、すっかり頭の中から抜け落ちてしまっていた。

……そして案の定それは起きた。隣で審査を受けていた女の子の腕に、広げた僕の手がぶつかってしまったのだ。

「あ、すいません」

僕はその瞬間、自身が演技中という事も忘れ、『風の子』から現実に戻ると、その女の子に向かって思いっきり謝ってしまうのだった。すると、先ほどまで高揚していたテンションも一気に下がってしまい、またいつもの奥村光弘に戻ってしまったのだ。

演技を中断した僕に、坂野先生は特にその表情を変える事もなく、「はい、結構です」と言うと、採点表にスラスラとペンを走らせた。先生の顔を伺う限り、どうやら今回は大失敗のようだ。どんな事情があるかと、演技を途中で投げ出すなんて、プロの世界ではあってはならない事なのに……。

「次は……隣の川島先生に審査を受けてください」

いきなり走り回ったせいか、少々息遣いが荒くなっていた僕は、その採点表を受け取ると息を整えながら坂野先生に頭を下げるのだった。

次の審査に向け隣のテーブルに目をやると、先ほどぶつかった女の子がまだ審査中だった。その子も恐らく僕と同じ中学生くらいのもようだ。

その内容は、どうやらカリキュラムに書かれている台詞を基に演技をしているらしい。見ると彼女は全ての台詞を暗記済みのようで、目を輝かせ大きな声を出しその役を演じきっている。気付けば僕は目の前のライバルにすっかり見とれてしまっていた。

「ありがとうございます！」

その女の子は審査をする川島先生に深く頭を下げる。その声でもようやく我にかえる事が出来たのだった。瞬間、僕の気が引き締まった。彼女くらいのレベルでなければ合格は厳しいのだと。

すると、彼女は側で立っていた僕に気付き、微笑みながらエールを送ってくれる。

「お互い頑張ろうね」

先ほどぶつかった事で、「彼女はきつと怒っているだろうな」と、思い込んでいた僕は、その言葉に拍子抜けしてしまい、「あ、うん」としか言えなかったのだった。

- 10 - オーディション (6)

女の子が次の審査に向かい、僕は入れ代わるように川島先生の前に立った。と、同時に僕は思い出した。

「ああ、ヤバイ……台詞……」

彼女はその台詞を完璧に記憶し、演技に集中していたというのに、僕は課題の台詞など殆ど覚えていないのだ。カリキュラムにも一度目を通したかった僕だが、かといって読みながら台詞を喋るのはあまり良い印象を与えられないはずだ。

そう、及第点では駄目なのだ。彼女ほどのレベルに至らなければ、このオーディションは合格できない。ここまでの通算成績は恐らく一勝一敗。何としても勝ち越さねばならない。どうすればこの危機的状况を乗り越えられるのだろうか。僕はジッと川島先生の第一声を待った。

今日のオーディションで初めて女性の先生に審査してもらった。先ほどのように身体だけで表現させた坂野先生と違い、川島先生は本格的に役作りをさせるようだ。課題の台詞や設定が完全に思い出せない状態の僕にますます不安な思いがつのる。

川島先生が採点表を見る。すると少し鼻で笑った気がした。採点表にはこれまで審査した先生からのメッセージが書かれていたようだが、僕はそれをあえて見なかった。というよりも、場の雰囲気は飲まれ、読んでいる暇も無かったと言ったほうが正解かもしれない。

しばらくすると先生は思わぬ課題をぶつけてきた。

「じゃあ……あなたには即興で台詞を話してもらおうかな」

すぐには理解しがたい言葉だった。課題の台詞を覚えていないという僕の不安は一掃された。しかし……「即興?」。よくよくその言葉をかみ締めれば、それどころではない事にようやく気が付いた。またアドリブの要求ではないか! しかも今度はかなりの高難易度だ。こんな事なら読みながら台詞を喋って、顔の表情や動きで表現した方がいくらかマシではないか!

僕は何をどうすればいいのか、その新たな不安を抱え困り果てていた。すると混乱する僕に構う事無く、先生は少し考えこむ仕草の末、こう話しかけてきた。

「そうねえ……あなたは今好きな女性に告白しようとしています。でも、彼女はあなたの親友が好きです。そしてそれをあなたは知っています。その上で彼女に告白してください」

その無茶苦茶ゴーイングマイウェイな設定に、僕はますます混乱するのだった。

川島先生の課題は、『彼女を射止め、親友を捨てる』と言うものだ。僕は頭の中でその状況を仮に自分の立場だったらと置き換えて整理する。

もし、彼女に告白して返事がノーだった場合、その後の三人の間に漂う気まずい雰囲気はどうしろというのか。いや、むしろその逆で、彼女の返事が僕の望み通りになったとすれば、親友を裏切った罪悪感に打ちひしがれて生きる道が正しいと言い切れるだろうか。そして、「それも若さゆえのなせる業だ」などと一人感慨深くポツリと漏らすのだろうか。

あらぬ妄想の迷い道に陥る中、ふと川島先生に目をやった。考え込む僕に何かを問いかけたようだ。このままではいけない。早くこの設定の中の登場人物に移り移らねばならない。

だが、大きな問題がある。告白どころか僕自身、学校で女子と会話することなど殆どなかった。当然彼女などいないし、告白する仕事や、言葉の引き出しも持ち合わせていない。全てが未経験の中、漫画などで得た予備知識からその役を演じなければならぬ。つまりこれこそ真正銘の役作りだ。

「難しい?」

意を決したように川島先生が尋ねてきた。だが、ここで僕が「ハイ」と言っただけでこの課題から降参してしまえば、その時点で役者失格の烙印が押されるはずだ。僕は口元を引き締め、首を横に振る。

「いえ、大丈夫です」

もちろん、そんなワケが無い。ノープランで出た言葉だ。

先生は僕のその返事に笑顔で合図を送る。

「では、お願いします」

すると、僕の全身にこの日二度目の寒気が走り、青白い光が交錯する中で自然と体が動き出したのだった。

僕は机から少し後ろに下がると、場面転換よろしくクルツとその場で一回転し、そして俯きながら自ら創りあげた台詞を話し始める。

「急に呼び出してゴメン。……オレ、君がアイツを好きな事は知っている。……でも、やっぱり言わないと……。どうしてもオレの気がすまないんだ」

そして、目の前に居る川島先生の目を見つめ、僕は大声で言い切った。

「オレと結婚してください！」

その瞬間、会場内が一気に静まり返ったのだった。

僕の『告白』が轟いたその時、隣のテーブルに居た坂野先生がチラッとこちらを見た気がした。目視はしていないが、雰囲気その目が全く笑っていないと感じ取れた。するとどうだ、周りのライバル達も此方を伺っている事が、背中越しに伝わってくるではないか。そして、それらの眼差しも、坂野先生と同じく「失笑」という言葉が相応しい視線だった。もちろん、目視はしていないが。

僕は途端に「やってしまった」と心で呟いた。気付けばテンションはガタ落ち。そのクセ周りの反応はいたって冷静に受け止められた。おかげで目が泳いでいる事に自分でも気付いていたくらいだ。そして僕は改めて感じ取った。これは間違いなく大失敗だ……。

「はい、奥村さん結構ですよ……。ではこの採点表を受付に渡してから帰ってくださいね。お疲れ様でした」

川島先生は少し笑みを浮かべながら僕に採点表を差し出した。僕は特に気にも留めずに「ハイ」と応えて受け取ると、一目散に部屋の出口へと向かっていた。

「までよ……おかしいじゃないか」

ふと、部屋を見渡した僕は、ズラリと勢ぞろいした先生方を今一度見渡す。僕が審査を受けた先生はわずか三人。しかし、どう考えても三人で審査が終了とは思えない先生の数だ。そして、この理由が何を意味するのか思いつくまでに、そう時間はかからなかった。

「つまり、『お前なんか審査するまでもない』って事か……」

僕は力なく受付で採点表を渡すと、そのまま玄関先のロビーへ向かい肩を落とし歩いていく。冷たい廊下の中、背中越しに冷たい視線を感じながら……。

「やっぱり『結婚』は違うよな……せめて『付き合っ』てだよなあ……」

今更悔やんでも仕方が無いのに、後悔の数が冷たい視線と同じように僕の脳裏に突き刺さる。払っても、払っても、それは一向に止む気配が無い。

やがてビルの玄関が見えてくる。僕の目の前に太陽の光射す現実の世界が口を広げて待っていたのだった。

オーディション会場を後にして、ビルの外に出た僕。空を見れば嫌味なほどに真っ青な快晴だ。僕は力なくため息をついた。

「やっぱり俳優なんて……。芸能界なんて向いてないんだろうな」

実生活が地味すぎた僕にとって、芸能界はもうひとつの覆面を被った自分をさらけ出せそうな、そんな華やかなる世界だった。その世界でならば、僕はきつと僕にしかできない何かを残せそうな気がしていたのだ。

新しい自分の居場所を見つける為に受けたオーディションだったはず。でも、やり遂げた充実感や達成感はそこになかった。気づけば一人、僕はビルの玄関先でポーンと立ち尽くしていたのだった。

ドンッ

それはいきなりだった。その衝撃で僕はよろけて前のめりに倒れそうになった。

「トロトロ歩くな！ 邪魔なんじゃ。ポケット！」

そんな捨て台詞を残し、肩をいからせ歩いていく関西弁の男。恐らく高校生くらいだろうか。ビルの玄関はそれほど狭いわけでもないのに、わざわざ僕に目掛けて体当たりしたとしか考えられなかった。それでも僕は普段聞きなれない関西弁に威圧され「すみません」と小声で謝るのだった。もちろんそれは本心ではない。

「何だよアイツ……。感じ悪い奴……」

だからと言ってケンカを仕掛けるほど僕は強くない。その男の後ろ姿を、ただ睨みつけるしかなかった。オーディシヨンの不甲斐なさで落ち込む僕に、再び現実の弱さが襲い掛かってくる。

「はぁ……」

ビルを出た時のため息とは、また違う感情の混じったため息だった。それは目に見えるほど白く、冷たく。

しばらく目を充血させ、僕はいつしかトボトボと帰路に着くのだった。

家に帰ってきた僕が玄関のドアを開けると、廊下をかけてくる足音が響き渡る。騒々しいその音の発信元は妹の雪菜だった。

「兄ちゃんおかえり！ どうだった？ オーディション」

今更思い出したくも無い散々だったオーディション。詳しく話すのも面倒くさかった。

「別に……まあ、それなりに」

僕は、雪菜に目を合わせることなく言葉少なくリビングに向かって。そんな僕の気持ちが分かるはずもない雪菜はしつこく付きまとい尋ねてくる。

「ね、ね、オーディションには誰かいた？」

「誰って？」

「俳優さんとか、テレビに出ている人。審査員で友クンとか来てなかった？」

「友クン？」

「飯田友宏。『フェイス・アクト』所属じゃん」

「そんなの知らねーよ」

「えーっ？ だって事務所の先輩になるかもしれない役者サンだよ。覚えておかなきゃ……」

「煩いなあ！ もういいだろ。どこか行けよ！」

雪菜の言葉にカチンときてしまった僕は、つつい怒鳴り声をあげてしまった。驚いた雪菜はふて腐れてしまい、不機嫌そうに自分の部屋へ戻る。すると、リビングでテレビを見ていた母さんがボソツと言った。

「ちょっと冷たいよ。今の言い方」

「……」

「雪菜はね、今日ずっとアンタの事を心配していたんだからね」

「え……？」

「後で謝っておきなさいよ」

母さんの言葉、その時の僕は素直に受け止められなかった。その言葉の重みを、『家族』を受け入れる器を、独りよがりな僕は当然持ち合わせてはいなかったのだった。

オーデイションから二週間後、リビングで昼寝をしていた僕は雪菜の大声でたたき起こされた。

「兄ちゃん！ 兄ちゃん！」

「うるさいな。何だよ……」

「着たよ！ 『フェイス・アクト』から！ ほらっ！」

「あ……」

白いA4サイズの封筒。真ん中に大きめの直筆で奥村光弘様おくむらみつひろと書かれている。それは『フェイス・アクト』からの面接結果通知だ。どうせ落選の知らせだろうと最初は思った。その封筒の大きさと厚みを見るまでは。

「え……？ え？」

僕は急いで封筒を開いた。それでも慎重に、破らないように開封した。ひよつとすると、これから一生大切にしておかねばならない、そんな重大な知らせかもしれないからだ。

「これ……え？ ウソだろ」

そして、僕がその結果を読みきるまでに、雪菜が嬉しそうに口にした。

「おめでとつ、兄ちゃん」

「……ん、ありがとう」

「お母さんに知らせてくるね！」

雪菜はドタドタと二階に居る母さんの下へと階段を駆け上がった。僕はその間、何度も何度もその合格通知を眺めていた。何かの間違いか。いや、確かにその金縁で彩られた証書には、『合格』の文字がある。まあ、まさか金縁に『不合格証書』なんて書いて送ってくる嫌味なことはいらないだろう。

この二週間、諦めようと必死だった新しい居場所への扉。今それがまさに関かれようとしている現実を、僕は静かにかみ締めていたのだった。

「やったな、光弘」

その日の夕食、家族からの祝福に僕はただ苦笑いを浮かべた。合格証書を見て何時間経っただろう。今にしてもあのオーディションの内容で合格できるとは思えなかったからだ。

「でも、これからが本当の意味でのオーディションみたいなモノだからなあ。まあ頑張れよ」

励ましてくれた父さんの言葉で、ようやく僕はその世界を踏み出すスタートラインに立てた気がした。そうだ、まだ僕はスタートすら切っていないからだ。

「うん、頑張るよ」

華やかなる世界への第一歩が刻まれようとする。それは自分を変える為に求めてきた居場所。自分で行動に移し、切り拓いてゆく新しい世界。

ただ、自分一人の力だけで、居場所を作る事などできないのだと知ったのは、まだまだ先のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2087w/>

マジメかつ！ 笑道わらいのみち

2011年10月12日09時56分発行